

---

# ゼロの使い魔VS架空戦記

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔VS架空戦記

### 【Nコード】

N6579G

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

ゼロの使い魔と架空戦記である双頭鷲の紋章とのコラボです。口サイズでの才人VS7万をモチーフにして書きました。

## （前書き）

この小説はゼロの使い魔と学研刊行・高貫布土氏作の小説双頭鷲の紋章のコラボです。

ゼロの使い魔の原作至上主義の方、御都合主義とか戦争小説がダメな方は御遠慮下さい。

タルブでの戦いによって『レコン・キスタ』軍を撃退し、逆にアルビオンへの逆侵攻をかけたトリステイン王国。艦隊戦において辛勝し、部隊の上陸に成功。アルビオン制圧へと大手を掛けた。

ところが、降臨後に起きた味方部隊の反乱によってその状況は脆くも崩れ去り、それどころか反乱軍と『レコン・キスタ』軍を併せた計7万人の軍勢が撤退に入ったトリステイン軍の集結するロサイスの港に迫りつつあった。

このままではロサイスに残るトリステイン軍が危ない。同地にまだまだ数多くの軍人や従軍している民間人が残されていた。

そしてトリステインが最後の手段として採ったのは、伝説の系統である『虚無』を使える魔法使いの少女、ルイズに時間稼ぎをさせることであつた。

アンリエッタ女王、そして直に命令を下したマザリー二枢機卿に取つても断腸の想いで決断であつた。

だが当のルイズは、これを受け入れた。トリステイン王家と縁深い貴族の出であり、そしてアンリエッタを主君として親友として慕う彼女は、自らの身を捧げることを決めたのであつた。

しかしそれを受け入れられない人間もいた。ルイズの『使い魔』である異世界の少年平賀才人であつた。真つ直ぐな性格の彼は、自分の主人であり、自分が好意を寄せる少女に突きつけられた理不尽な命令を見過ごせなかったのだ。

才人は必死の説得を行ったが、ルイズも誇り高きトリステインの貴族であった。説得は上手く行かず、2人の議論は平行線に終わり、ついに時間切れを迎えてしまう。

そして才人が採った行動は、目の前の少女を助けるために自らの命を投げ出すという道だった。皮肉なことに、理不尽な死を防ぎたいがために、彼自身が帰還の難しい特攻に近い道を選んだのだ。だがそれ以外に残された選択肢はなかった。彼は別れの前に2人だけの結婚式を行い、ルイズに眠り薬が入ったワインを飲ませた。

ルイズが完全に眠ると、才人はロマリアから義勇兵として参加していた神官ジュリオに彼女を託し、一人死地へと赴いた。自らの命を犠牲に、愛する人を守るために。

ロサイス郊外の丘で、才人は迫り来るアルビオンの大軍を見つめていた。平原を埋め尽くすかのようにメイジ、傭兵、徴兵された平民だけではなく、見るからに恐ろしいトルル鬼などまで混ざっている。その数トリステイン軍の反乱部隊も含めて7万人。

それに対して才人の手元にあるのは、相棒の剣であるデルフリンガー一振りのみだった。伝説の吸魔の剣とはいえ、これだけの大軍を相手にするのは無理だ。そしてその才人を助けてくれる人間は1人もいない。才人は目の前に広がる光景と、自分の現状を見比べて己の運命を悟る。

「デルフ・・・俺死ぬのかな？」

相棒のインテリジェンスソードに語りかける才人。その声はいつになく暗い。対するデルフの声はいつもどおりだった。

「だろうな・・・いくらお前が伝説の『ガンダールブ』でも、これだけの数を倒すことなんか無理だ。途中で死ぬのは目に見えてるぜ。」

相棒の非情かつ的確な答えを聞き、才人は溜息を吐く。だがそれで状況が好転するはずなどもちろんない。そして彼の退路は絶たれていた。

「そうか・・・俺死ぬんだ・・・けど、これ以外に方法はないんだ。」

才人はデルフを強く握り締め、悲壮な決意を固める。

「行くぞデルフ!!」

「おうよ、相棒!!」

才人とデルフは最後の覚悟を決め、7万人の軍勢へと向かって行った。

「うおおおお!!」

才人が自らの命を捨てる覚悟で、アルビオン軍への突撃を始めた

頃、ルイズは空中の船上で離れ行くアルビオン大陸を見つめていた。

「才人!!」

アルビオンに残った彼の名前を叫ぶ。その声は虚しく陽が落ちて夕闇の迫る空へと消え行くだけだった。

薬の効力が切れて目覚めると、そこは船の上であった。どうしてこんな所にいるのかわからず混乱する彼女であったが、その後ジュリオから全てを聞かされていた。

慌ててアルビオンへ戻ろうとしたが、もはや船は出港した後で、全てが後の祭りであった。彼女に出来るのは、ただ小さくなっていくアルビオン大陸を船べりから眺めることだけであった。

「どうして!?!どうして!?!」

何度も疑問を口に出すが、その疑問に答えてくれるはずの才人は目の前にいなかった。いや、もしかしたらもうこの世にさえないかもしれない。

ルイズは自分の身代わりになった彼に対して何も出来なかった。最後まで自分のことを気遣い、想ってくれたパートナーに対して。

不安や怒り、そして絶望感が入り混じった気持ちが彼女を支配した。如何に彼が伝説の使い魔でも、7万人の軍勢と戦って生きて帰れる道理などないことは、子供でもわかることであった。

「才人……ごめん……」

悲しみに打ちひしがれる彼女に、ジュリオも、そして同じ船に乗り合わせたメイドのシエスタも掛ける声が見つからなかった。

だがその時、船上にいた誰かが叫んだ。

「何だあれは!？」

その言葉に、一斉に甲板にいた人間は彼が指差した方へと視線を向けた。彼らが見たのは、自分たちの至近距離に現れた空中に浮かぶ9つの白い影であった。

最初その姿に誰もがアルビオン艦隊の奇襲攻撃を考えた。

「アルビオンの軍艦か!？」

「敵か!？」

「もうだめだ!!」

一瞬甲板上の人間たちは恐慌状態となる。船団の他の船も同様であつたらしく、中には隊列からはなれて一目散に逃げようとする船まで現れた。

だが、その9つの影は撤退する船団には目もくれず、ただひたすらアルビオン大陸、厳密には今しがた彼らが逃げてきたロサイスの方向へと飛んでいった。

最初は悲しみのあまり無関心だったルイズも、ほんのわずかな時間ではあつたがその姿を見た。そして何故か分らないが、その姿に安堵の気持ちを覚えたのであつた。まるでその物体が、才人を助



けてくれる最後の砦であるかのように彼女には思えたのだ。

敵に突撃して10分、才人はまさに鬼神に等しい戦いをしていた。『ガンダールブ』の力をフルに使って目の前に現れる敵を片っ端から切りつけ、戦闘不能に追い込んでいく。

「うおりゃああ!!」

「ぐお!!」

また1人、甲冑を纏った兵士が才人の一撃を受けて戦闘不能に追い込まれた。既に才人自身数え切れない敵を倒した。

だが、相手が7万人ではやはり最初から勝負は見えていた。才人は単独で2桁以上の敵を倒していたが、それも敵軍の侵攻を止める以外にも特に打撃を与えるものではなかった。

逆に才人の方は時間が経つと共に体力を消耗し、さらに敵から受ける攻撃によって傷ついていった。

「くそ!切りがない!!」

悪態を吐くが、もはやそんな余裕さえ彼にはなかった。

「相棒後ろだ!!」

デルフの叫びと共に才人は素早く避けようとするが、襲い掛かってきたのは炎であった。明らかに魔法による攻撃だった。

「く!!」

デルフを構えなおし、なんとかそれを吸い込むが、その間に今度は槍や剣を持った敵の歩兵が接近し、攻撃を掛けてくる。

「畜生!!」

デルフを動かし、それらをなんとか防ごうとするが周りは完全に敵に囲まれてしまい、もはや敵の攻撃を避けることなど困難だった。

そしてついに、彼の足を一本の矢が射抜いた。

「う!？」

「相棒!!」

倒れこむ才人、すかさずアルビオン軍は彼への攻撃を掛けようとする。動けなくなった人間等、最早的以外の何物でもない。

「クソ・・・こんな所で・・・」

足の怪我は酷かった。才人は徐々に自分の体から血が失われていくのを感じていた。実際負傷した足からはドクドクと鮮血が地面に流れていた。既に大なり小なりの傷を受けている彼には致命傷に近かった。

そんな彼に、アルビオン軍は容赦しようとはしない。メイジは杖

を構えて攻撃魔法の詠唱を始め、平民の兵士たちは剣や槍を構えなおして才人の方向にその矛先を向けていた。

「デルフ・・・俺やつぱり死ぬんだ・・・けど、これで良かったんだよな。ルイズも助かったし・・・足止めにはなったんだろうから・・・」

才人は観念したように言った。そんな彼に、倒れた際に地面へと落ちたデルフが叱咤するように言う。

「相棒！しっかりしろ！」

だがもう才人には、デルフの言葉に答えるだけの力もなかった。

「攻撃用意！！」

死を覚悟する才人に追い討ちを掛けるように、アルビオン軍の指揮官が叫ぶ声が聞こえてきた。おそらく数秒後には、才人は集中攻撃を受けてこの異郷の地に散るであろう。

不思議と死を覚悟すると怖くはなかった。才人は静かに目を瞑ってその時を待った。

「相棒！！」

デルフが心の底から叫んだ。そしてその瞬間、才人の意識は完全に途切れた。

「・・・と!・・・才人!」

頭の中に響いてきた声を聞いて、才人は目を覚ました。

「う!」

体が鉛の様に重かった。それに所々痛い。しかしながら、それが逆に自分は生きていると言うことを強く訴えていた。

「え!？」

彼は驚いて目を開いた。そしてその視界内には、見覚えのある顔が並んでいた。

「才人!!」

「才人さん!」

「才人ちゃん!」

「ルイズ・・・シエスタ・・・それにスカロンさん・・・俺生きているのか?」

死を覚悟して意識を手放したと言うのに、自分は生きているという現実には、才人の頭は混乱する。

「そうよ!このバカ!!なんであんなことしたのよ!!あんだ、あと少して死ぬところだったのよ。」

「けど、良かったです。才さんが目を覚ましてくれて。3日3晩目を覚まさないから、さすがに心配しちゃいました。」

2人の言葉を聞いて、才人は未だ重い頭を働かせて今の状況を考える。とにかく自分は何とかあの状況から生還できたい。ただし、死ぬ寸前の傷を受けたのは事実のようで、そのせいで3日間眠っていたらしい。

「そうか3日間も・・・そう言えば、ここはどこ？」

「ロサイスの宿場の1つよ。」

ルイズの言葉に、才人は少しばかり驚いた。

「ロサイス！・・・だってトリスティン軍は撤退したんじゃない？」

「その後アルビオン軍が撃退されたと聞いて、急いで引き返したのよ。」

スカロンが相変わらずのオカマ言葉で言う。

「撃退！？え！？一体どういうこと！？」

もう訳がわからなかった。自分が叩いた敵は3桁に行くか行かないかだ。それだけの被害で敵が撤退する等ありえない。

そんな彼の疑問には、シエスタが答えた。

「才さんが敵を足止めしてくれたおかげです。そこをあの人たち

が攻撃して、アルビオン軍は撤退したんです。」

「あの人たち？」

一体誰のことだろうと首を傾げる才人。

「ほら、あそこ。」

ルイズが部屋の窓から空を指差した。そして才人はそこで信じられない物を目にした。

「うん！？どういうことだ！？」

才人の意識はこれで一気に戻った。

「どうして飛行船が飛んでいるんだ！！」

ルイズが指差した空には、1隻の飛行船（ガスで袋を満たして飛ぶ方）がプカプカと浮かんでいた。

時系列はトリステインの船団がロサイスを出港した直後まで遡る。

その時トリステインの撤退船団とすれ違うように、9隻の装甲飛行船がアルビオン大陸へと向かっていた。

「報告にあったトリステインの撤退船団です！」

見張り所からの報告を受けて、装甲飛行船ZB29号の機長にして第七飛行船団を率いるイリヤ・イワノビッチ・チャコフ東露西亜帝国軍中佐は呆れるように言った。

「全く、空を船が飛ぶなんて本当に滑稽な光景だな。」

すると後ろにいた男が窘めるように言う。

「ですが、この世界の人間からしてみればこんな丸い物体が飛ぶほうがよっぽどおかしいようで。そうですね、アンリエッタ女王陛下。」

その男の隣には、こんな場所には似つかわしくないドレスを着込み、両側を女剣士に守られた若い女性が立っていた。現トリステイン王国女王のアンリエッタだ。

「ええ。風石も使っていないというのに、どうしてこのように浮かんでいるのか未だに理解しがたい所があります。」

異世界の女王の言葉に、チャコフ中佐はどこかばつの悪そうな顔をする。

「はあ・・・まあ良い。ところで南郷少佐、攻撃は夜間攻撃となるが大丈夫か？」

南郷と呼ばれたその男はチャコフの問いに、笑みを浮かべて答えた。

「御安心を。全員十分な訓練を行っていますので。仮に飛行船に戻

れないとしても、予定地は平原なんですよ？だつたら飛行船を下ろして整備兵に松明を焚かせて臨時の滑走路にすれば事足ります。」

「また無茶を言うな。まあ、その様子なら大丈夫そうだろ。しっかりと頼むぞ、そろそろ発進予定時刻だ。」

「はい、それでは私は出撃準備に掛かります。」

チャコフと南郷は互いに敬礼をした。そして南郷は格納庫へと行くとしたが、そんな彼にアンリエッタが声をかける。

「あの。」

「はい！？」

「どうかよろしくお願いします。命令を許可した自分が言うのも何ですが、彼を、使い魔さんを助けてあげて下さい。」

すると、南郷は真剣な表情で返す。

「ええ、我々も勇敢な同胞をなんとかしても助け上げたいと思っていますので。出来るだけのことはします。」

そう言い残して、彼は今度こそ格納庫へ向かって走っていった。

先ほどチャコフ中佐と喋っていたブリッジから20m程後方へ行



った所に、航空機用の格納庫があった。そこには計2機の戦闘機が天井からぶら下がる形で待機していた。

「整備班長、間もなく出るぞ！」

「了解！エンジン、機体ともに異常なしです。」

「爆装は完了しているな？」

「両翼下にそれぞれ1発ずつの60kg爆弾を吊りました。機銃弾も目一杯積みました。歩兵を相手にするなら問題ないでしょう。ただし、過重負荷での夜間発艦と夜間攻撃になりますからお気を付けて。」

「おう、わかった。」

整備班長とのやり取りを終えると、南郷はハシゴを伝ってぶら下げられている機体へと登った。

無線機のスイッチを入れ、部下の状況を確認する。

「こちら白1番、戦隊長の南郷だ。各部隊搭乗員の搭乗状況を報告せ！」

するとZB29号を含む全ての装甲飛行船に搭載されている戦闘機に、搭乗員が搭乗しており、全機が発進可能と返信がなされた。

「了解、これより発進に移る。夜間の上、過重負荷での出撃である。全機細心の注意を払え。発進後は飛行船の投下する照明弾を頼りに敵軍を攻撃せよ。なお、現在少年が1人で敵軍と対峙しているのこ

と。敵味方の区別は難しいが、出来うる限り誤射のないようにせよ。

「了解！！」

部下たちが発した威勢の良い返事に満足しつつ、彼は発進可能を整備兵に手信号で報せる。するとまもなく、彼の乗り込んだ機体が動き始めた。

軽い振動と共に彼の機体は格納庫全部に設けられた発進用の開口部へと運ばれ、そこで空中に吊り下げられる形となった。夜間ではあるが、9隻の飛行船が煌々とサーチライトを付けてくれているおかげで視界には不自由しない。

機体が完全にぶら下がった所で、彼はエンジンをスタートさせた。エンジンは作動不慮も起こさず、軽快に回り始めた。

「ようし、行くか。」

彼は大きく手を振った。途端に、ガチャンという音がして彼の機体はフックから外され、大空へと浮かぶ。

「こちら白1号、発艦に成功した。後続機も順次発艦せよ。発艦後ただちに母船後方に待避し、編隊を組め。翼端灯と着陸灯をしつかりつける、じゃないと空中衝突するぞ！」

「了解！！」

彼は飛行船のいる高度から若干高度を下げ、機体を回して飛行船への後方へと回ろつとする。

飛行船の方をチラッと見ると、9隻の開口部からは次々と爆弾を翼下に抱えた複葉と単葉の戦闘機が空中へと放たれていた。9隻の内4隻には各4機ずつの中島とシコルスキー合作のSna1型ヴァラベエーイ（ロシア語で雀）戦闘機が、残る5隻には5機ずつのSe1型プチャーラー（ロシア語で蜂）戦闘機が搭載されている。合計すると41機だ。

7万人の軍勢にどこまで対抗できるかわからないが、各機が抱えた82発の爆弾と各1挺ずつの77mmと127mm機銃があればそれなりの打撃を与えられるはずだった。

南郷率いる戦闘機隊は飛行船が投下する照明弾の灯りを頼りに敵軍へ攻撃を掛ける予定だった。その中にはたった1人で戦う日本人の少年がいると彼は聞かされていた。空中から上手く確認できる可能性は低いが、もし見つけたら着陸してでも助けるつもりだった。

夜間発艦と夜間攻撃のために、衝突事故を心配していたが幸いにもこの世界では双月のおかげでそれなりに空は明るかった。地球の満月以上に明るい。だから味方戦闘機のシルエットさえ楽に確認することが出来た。発艦時のサーチライトはいらなかったかもしれない。

およそ15分で全機がハルケギニアの空へと舞い上がっていた。その直後無線が入る。

「こちら船団長のチャコフだ。前方下方にて多数の灯火を確認。攻撃予定地だ。各機は各船から照明弾が投下されると同時に攻撃を開始せよ。」

「戦隊長了解！全機へ聞いたとおりだ。攻撃に入るぞ、安全装置解除！」

南郷の指示の下、各機は機銃と爆弾の安全装置を解除し、いつでも放てるようにした。

それから間もなくして、9隻の装甲飛行船から20発近い照明弾が投下され、アルビオンの大地に展開する7万人の将兵、そして今当にトドメをさされんとしていた才人の姿を照らし出した。

「何だ！？」

いきなり空にいくつもの強烈な光が出現したことで、アルビオンの兵士たちは驚き、また動揺した。一瞬目がくらみ、視力が奪われる。

だがそれもほんの束の間の出来事だった。数秒後部隊のあちこちから爆発が発生し、将兵たちを吹き飛ばした。

「何事だ！？」

「敵襲！新手の敵襲だ！」

「けど一体どこからだ！？」

狼狽するアルビオン軍の兵士たち。そんな彼らの頭上からは、容

赦なく爆弾と機関銃弾の雨が降り注がれた。小型爆弾と言えど生身の人間を殺傷するだけなら充分すぎる威力を発揮する。さらに機関銃弾は夜間であるために、曳光弾の光が鮮やかに照らし出される。

そうした武器の威力もさることながら、それらを撃ち放ちつつエンジン音を轟かせて上空を通り過ぎていく戦闘機の姿は、アルビオンの兵士たちには悪魔の怪鳥のように見えた。

一部の冷静な指揮官は、ここでようやく反撃を命じた。

「敵は空からだ！撃て！撃ち落せ！」

途端に一部のメイジが空中へ向けて魔法を放った。しかし、単葉のSnailであれば400km強、複葉のSe1でも320kmを越える最高速度を誇っている。150km程度でしか飛べない火竜くらいしか見たことのないアルビオンの兵士たちには速すぎた。

「だ、だめだ！速過ぎる！！」

反撃の手段は全くなかった。その間にも上空を乱舞する機体からは機関銃弾が放たれ続ける。爆弾は既に使い切っていたが、残る機関銃による攻撃で次々と兵士たちをなぎ倒して行った。

7万人の兵力を誇り、トリステイン軍を追い落とし、再びアルビオン大陸の覇者にならんとしていたレコン・キスタ軍はもはや崩壊寸前だった。死者数こそそれ程ではないが、夜空から見たこともない兵器で一方的に撃たれ続けて正常でいられるはずがなかった。これには才人の超人的な戦いと、攻撃直前の照明弾の光も関係していた。それらの精神的重圧がアルビオンの兵士の心を蝕んでいた。

そしてついに、1人の指揮官が叫んだ。

「や、止むをえん。撤退だ！一旦下がるんだ！！」

「退け！退け！！」

この言葉はあつと言う間にアルビオン軍内に伝染し、兵士たちは一斉に先ほどまで目指していたロサイスとは逆の方向へと逃げ始めた。

「こちら白1番、敵軍は後退に移った。繰り返す、敵軍は後退に移った。戦闘機隊は全機爆弾投下完了にして、銃弾もほとんど残っていない。」

南郷は敵軍の後退を確認すると、母船へ向かって通信を入れた。

「了解した。ZB30号以下4隻が掃討戦に移る。それから救助目標の少年は確認できたか？」

「確認する。白1番より全機へ、救助目標の少年を救助、または確認した者はいるか？」

南郷自身は、地面を埋め尽くすかのような大軍を攻撃するのに手一杯で、少年の姿を見つけ出すことは出来なかった。

しかし直ぐに、部下の1人から喜ばしい報告が舞い込んできた。

「こちら黄色13番、目標の少年を先ほど自分が発見、側にあつた剣と共にただいま収容しました。重傷であるので、速やかな母船への収容をお願いします。」

「おお、古賀一等兵曹か！よくやった。母船へ、目標の少年を収容した。重傷の模様、速やかなる収容を要請する。」

すると間髪入れずに、チャコフ中佐の声が返ってきた。

「了解、黄色13番は旗艦であるZB29号へ着船せよ。代わりに白4番はZB33号が再上昇を終え次第、そちらへ向かえ。」

「了解。白一番より全機へ、各々の判断にて母船へ帰還せよ。ただしZB29号への着船は黄色13番を優先し、またZB30号以下4隻の艦載機は掃討船完了まで空中待機せよ。」

命令を終えると、南郷は機体を上昇させて母船であるZB29号へと向かった。

「ああ、使い魔さん！」

ZB29号の医務室で、アンリエッタは収容した少年と対面した。間違いなくルイズの使い魔である才人だった。だがその姿は痛々しい。体中傷だらけで服はボロボロ、そして血を大量に失ったのか顔は真っ青であった。

「治療を行ないますので下がって下さい！」

看護兵がアンリエッタに下がるよう言った。だが、彼女はその言

葉に従わず、逆に杖を取り出して言った。

「私が治療します。使い魔さんをこんな目に遭わせてしまったのは私の責任ですから。」

そしてアンリエッタは、呪文を詠唱して強力な『水魔法』を才人に掛けた。さすがに重傷であるため完治とは程遠いが、それでも傷が少しずつ治っていく光景に看護兵も、彼を運び込んだ古賀も、そして遅れてやってきた南郷も目を見張った。

「すごい、これが魔法って言う奴か・・・なるほど、これだけの力があれば魔法使いどもがいばりたがるのも無理はないな。それにしても、ロシアの軍隊に入ったかと思ったら、今度は魔法使いが牛耳る異世界と来たもんだ。」

南郷はここ最近自分の周りで起こった事態を思い出して苦笑した。

南郷は本来大日本帝国海軍の戦闘機パイロットで、90式艦上戦闘機に乗っていた。そんな中で、東露西亞帝国空軍への出向を命じられた。

東露西亞帝国は1921年に処刑されたニコライ2世一家の生き残りであるアナスタシア女王によってアラスカに建国された国で、建国以来日本とは同盟国であった。

その東露帝国は建国以来絶えずソ連の脅威に脅えており、強力な軍事力が必要であった。ところが、アラスカの人口は100万人しかおらず、とても大規模な軍隊を編成できない。そこで日本とイギリスから大量の傭兵軍人を得て軍隊を維持していた。



東露帝国では砕氷戦艦など一風変わった兵器を保有しているが、今南郷が乗っている装甲飛行船もその1つだ。この装甲飛行船は、アメリカの戦闘機搭載飛行船である「アクロン」級をモデルに、船体内に4〜5機の専用戦闘機を搭載することが出来た。

プチーラーとヴァラベエーイの両戦闘機はその飛行船搭載用戦闘機で、飛行船に収容するための大型フックを備えている。プチーラーはアメリカのF9Cスパローホーク、ヴァラベエーイは日本のキ11型戦闘機の改修機であった。

これら戦闘機を搭載した装甲飛行船団はソ連領への偵察や爆撃任務に充当されており、南郷も既に3回ソ連戦闘機と空中戦を経験していた。

ところが4回目の出撃中に船団は霧にまかれてあわや衝突事故を起こすところまで行った。その危機を脱して霧を出たと思いきや、なんとそこは見たことも聞いたこともないトリステインという王国の上空であった。

取り敢えず祖国への帰還を考慮しつつ、当座の停泊地を確保するためにトリステインと交渉に入ったのだが、相手はこちらを平民として見下すばかりで最初は交渉にすらならなかった。一歩間違えば戦闘に至る所であったが、ちょうどそのトリステインが戦争中ということもあり、なんとか交渉を続行できた。

そして半日前交渉の会議中に、トリステインにとって驚愕の報告が入った。アルビオン遠征軍内で反乱が発生し、さらにアルビオン軍主力によってトリステイン軍が危機に立っていると。

トリステイン側の人間はこれで恐慌状態に陥ったが、東露側の代

表であつたチャコフ中佐はこれをチャンスとばかりに言い切つた。

「それでは我々がトリステイン軍の危機を救つて見せましょう。それが出来た時は我々への食料などの補給をお願いしたい。」

トリステイン側はこの提案に最初は面食らつたが、すぐに許可を出してきた。使えるものならなんでも良いと考えたらしい。それに失つても彼らにとっては惜しくない物であつた。

そして急遽飛行船団はアルビオンへの地図を貰い受けてトリスタニアを出港し、最大速度である120kmのスピードでアルビオン大陸へと向かつたのであつた。

その途中、すれ違つたトリステインの船団に対してアルビオンへの水先案内人の提供を要請したのであるが、その要請に従つてやつてきたのがトリステインの女王陛下であつたから、チェコフ以下全乗員が驚愕した。

彼女からしてみれば、やっぱり親友を1人置いてきたことに後ろめたさがあつたらしい。

もつとも、さすがに未知の国の飛行船に1人で乗るなどということとはなく、各船に2人ずつ警備と監視の人間が乗せられた。しかしながら、逆にこれは情報が集まるようになったため、飛行船団側には好都合であつた。

飛行船団はアンリエッタ経由で入ってきた情報によつて、アルビオン軍の規模や想定戦場、さらには才人が1人戦っているということとを把握できたのであつた。

そして彼らの戦闘への介入は、アルビオン軍の敗走という戦局を一気にひっくり返したものとなった。

早速アンリエッタは撤退中の船団に引き返すよう命令し、アルビオンへの再侵攻へと移った。だがその後の展開は誰もが予想出来ないものだった。なにせ女王である彼女が、敵軍に1人で突っ込んだ勇敢な少年とはいえ、1人の平民の元へと走り自らの力で治療をしたのだから。

これが後にどんな影響を与えるかは神のみぞ知ることだった。

その後飛行船団は一旦ロサイスまで戻ってトリステイン軍と合流、アンリエッタ女王と才人を降ろした。

ずっと眠っていたため感知できなかったが、凡そ一晩の間にそのような動きがあったのだ。才人はその事を、ルイズやシエスタ、さらにその後やってきた南郷少佐、そしてアンリエッタから聞かされた。

「そうだったのか。そうか、あの人たちは俺が生きていた地球とは別の世界から来たのか。」

「本当にビックリね。けど、あの人たちがいなかったらあんたは死んでいたし、戦争も負けていたでしょうね。それにしても、姫様はどうしてあんな無茶をされたのかしら？」

ルイズはアンリエッタの行動に疑問を呈した。

「そりゃあ、お前のことが心配だったからじゃないの？」

「だからって見知らぬ国の船いきなり乗るなんて・・・それに、そっちも気になるけどあんたの所へ一番に駆けつけたのも気になるわ。まさかとは思うけど、あんた姫様に・・・」

「だから何にもしてないって・・・そりゃ姫様のことは可愛いとは思いつけてくれたのも嬉しいけど、俺はお前を守れたことと、お前の所へ帰って来れたことが一番嬉しい。」

「え！？」

才人は新たな異世界への闖入者の正体やアンリエッタが自分を助けてくれたことに驚きはしたものの、それよりもルイズを無事助けられて、さらに生きて彼女の元へと戻れたことを喜んでいた。

「そ、そう・・・私のところへ帰ってこれたのがね・・・だったら才人約束して！」

「何を？」

「もう、私の側から離れないって・・・」

「え！？」

今度は才人が驚いた。

「・・・・」

その後2人は、言うべき言葉が見つからずただ顔を赤くしてお互いの顔を見つめるのみだった。

それからさらに3日後、アルビオンへと再上陸したトリステイン軍は正気に戻って合流した部隊、そして頼もしき援軍として加わった東露帝国の飛行船団とその艦載機によって戦争に決着をつけた。アルビオンはトリステインに対して無条件降伏したのであった。

しかしハルケギニアにおける彼らの戦いはまだ始まったばかりであつた。

（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ちなみにこの話は、ニコニコ動画で見たゼロ魔とエースコンバットのMADの影響を受けて書きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6579g/>

---

ゼロの使い魔VS架空戦記

2010年10月17日03時26分発行